

慶安五年刊『訳和和歌集』翻刻と解題 附校異（六）

内野，優子
西南学院大学非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/10332>

出版情報：文献探究. 45, pp.75-90, 2007-03-30. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



慶安五年刊『訳和歌集』翻刻と解題 附校異 (六)

内野優子

翻刻

本稿は、通し番号437番から最後まで(499番)の翻刻である。凡例は先号の通り。底本の虫損箇所は□で示し、駒澤大学図書館所蔵『訳和歌集』(慶安五年刊)によつて補つた。また今回、対校本である国文学研究資料館所蔵本(略号「承」)においても虫損が見られたため、その当該箇所を□で示し、同系統に分類される叡山文庫所蔵『法花訳和集』(承応二年刊)によつて補つた。

これまでと同様に、内閣文庫所蔵本の歌順の異同を予め記すが(歌番号は、底本の通し番号による)、詳しくは『文献探究』第43号の拙稿に掲げた『訳和集』諸本対照表」を参照されたい。

450 ↓ 452 ↓ 451 ↓ 453 . . . 489 ↓ 491 ↓ 490 ↓ 492

(※内閣本には474番の歌はなく、詠者名と実海注のみを残す。)

437

鷲の山あまた蓮のひらけしを驚なからしる人そなき

妙音めうおんは積尊せきそんの昔の弟子たるによりて出

世の本懐ほんくわいをとけ給りやうぜんふ靈山むしろの筵むしろに來給むしろへり

その瑞相すいさうとしてまつ金銀等きんぎんとうのたからにて

つくりたる蓮花れんけあまた出現しゆつげんせり文殊もんじゆこ

れを見て何の故あつてかくのこことく蓮花

はおほく來れるそと仏ぶつに問奉とんほうりしに東方

淨花じやうけ宿王智しゆくおうちと申まを仏ぶつの淨光じやうくわう莊嚴じやうげん国こくと

いふ国より妙音めうおんといふ大士のわれらよし

ありて只今きたるへしとの給たまひ侍りされは

此哥このかに驚おどろなからしる人なしとは文殊もんじゆを始

として一会いへの大衆たいしゆの事なり

【校異】

(七・オ) ⑤ (詞書) — ナシ 「内」、⑥ 前大僧正 — ナシ 「内」、⑧ 妙音めうおんは — 妙音菩薩めうおんぼさつは 「内」、⑧ 積尊 — 釈迦しやくか 「内」、⑧ よりて — よつて

妙音菩薩めうおんぼさつ品
衆宝蓮花しゆほうれんけのころを
前大僧正慈鎮
(五・七・オ・四行目)

「内」、⑨ 筵―せき「内」、(七・ウ) ① 蓮花―蓮花の「内」、② あつて―ありて「内」、③ 来れるそと仏に問奉りしに―来ると仏に問

奉給ひしに「内」、④ 宿王智と申仏の―宿王智仏の「内」、④ といふ国より―より「内」、⑤ といふ―と云る「内」、⑤ われら―我に

「内」、⑦ 哥に―哥は「内」、⑧ 大衆―衆「内」
不_レ鼓 自 鳴のころを

鷲の山妙なる声の光には風ふかねとも嶺の松風

妙音は昔雲雷音王と申仏の御もとにし

て十萬種の伎樂をもつて彼仏を供養し

奉しむくひに種々の伎樂の身をはなれ

ぬ事をいへり松風は琴のねによせ侍るか

【校異】 (七・ウ) ⑨のころを―ナシ「内」、(八・オ) ①王と申仏―王仏

「内」、①にして―にて「内」、③むくひに―むくひにて「内」、③の身―ナシ「内」

赤染衛門

爰にのみ有とやは見るいつくにも妙なる声に法をこそきけ

【校異】 (八・オ) 集付ナシ―風雅「内」、⑥爰―爰オモカ「内」、⑥声―音「内」

中納言定資

身をかへてあまたにみえし姿こそ人をもらさぬ誓成けれ

この大士は卅四身に身をかへ十方恒沙の世界

にあまねくいたりて説法して衆生をす

くひ給ふ故にかくのごとく説侍る敷

【校異】 (八・オ) ⑨かへ―かへて「内」、⑨十方―十万「内」、(八・ウ)

①かくのごとく説侍る敷―かく説る也「内」

ヲヨヒモロクハノシジヨニナヨクサヤエ
及 衆 難処皆能救済のころを

俊成

あらし海きひしき山の中なれと妙なる声はへたてさりけり

三途八難のあしき処にもゆひて利益した

まふ故に海山にたとへていへり

【校異】 (八・ウ) ②のころを―ナシ「内」、集付ナシ―新統古「内」、④

きひしき―さひしき「内」、④声―音「内」法「承」、⑤あしき処にも―悪処にも「内」、⑤ゆひて利益したまふ故に―行て苦をすくひ給故にそれを「内」

堀川右大臣

しつむへき人をかなしと思ふには測を瀬になす物にそ有ける

在_レ処変 現度ニ脱衆 生_レといふ文あり悪趣を

も善趣と変する利益のあれば測を瀬に

なすとたとへよみ侍るなり

(九・オ)

【校異】 (八・ウ) ⑩善趣と―善趣をもと「内」、⑩利益の―利益「内」、(九

第八卷普門品

大納言公任

世をすくふうちには誰か入さらむあまねき門は人しさゝねは

観_レ音大士の利益はあまねく十界の門戸を

をしひらき身を卅三に変し説を十九

種にわかちてをのくねかふ処の法を説ゆ

へに此品の名を普門品と名つけ侍り此門

はひらけたるまでにてとつる事なければ

誰かいらさらんといへり

【校異】

(九・オ) ③大納言―前大納言「内」、④誰か―たか「内」、④門は
―門を「承」、⑤門戸を―門戸「内」、⑥卅三に變し説を―卅三身
に變して願ふ所の法を「内」、⑧の名―ナシ「内」、⑧品と―品と
は「内」、⑨ひらけたるまでにて―ひらけたるまゝにて「内」、⑩
といへり―とは残る人なく入へしとなり「内」
若為モシタメニ大水タイスイニ所サレンレ漂ハセヨセ稱セウニ其名号ミヤカウラス一即得アサキト浅処コロラ一(九・ウ)
のこゝろをよみ侍りける

従三位光成

444

行水のふかき流にしつみても浅瀬ありとて猶頼むへき

【校異】

(九・ウ) ①為タメニ大水タイスイ―以水「内」、②のこゝろをよみ侍りける
―ナシ「内」、集付ナシ―新後撰「内」、④とて―とそ「内」「承」

平忠度

445

をり立て頼むとなれば飛鳥川瀨も瀨になる物とこそきけ

此文は觀音を称念する人七難をまぬかる

事を説中の水難を説文なり但まへの

哥は水底にしつみてなかれゆくともつゐに

浅せにあふへしとたのみをかけ後のうたは

飛鳥川あすかの瀨ふちせにかはるによせて觀音の

神力じんりきふかき瀨ふちせをあさき瀨ふちせに變せしめむ

といふこゝろなり

【校異】

(九・ウ) ⑤平忠度―平忠度朝臣「内」、集付ナシ―風雅「内」、⑦
まぬかる―まぬかるゝ「内」、(一〇・オ) ①瀨ふちせにかはるによせ
て―瀨せはかはりやすきによせて「内」、②變せしめ―變しめ「内」

便得スナハチ離ハナレレ欲コトヲのこゝろを

前大僧正慈鎮

446

小夜衣うらにも夢を覚る哉かさねし妻を思ひかへして

これは三毒さんどくの煩惱ぼんなんふかゝ覽みもの常に觀音

を念し奉らはすなはちはなるへしと説文

の中に姪欲みんよくのはなるゝ相さうをよみ侍り

妻をかさねしをおもひかへして夢とさむ

るとなり

【校異】

(一〇・オ) ④のこゝろを―ナシ「内」、⑤前大僧正―ナシ「内」、

⑥覚る―覚る「承」、⑦ふかゝ覽もの―ふかき者「内」、⑧すなは

ち―ナシ「内」、⑧説文の中に姪欲の―かく文也今の哥は三毒の

なかの姪欲を「内」、⑨侍り―侍るなれば「内」、⑩さむるとなり

―さとるとなり「内」

宿殖ムカシウヘ徳本テトク衆人愛ラシユニ敬ニのこゝろを

頓阿

447

石上ふるのゝ桜春ことしするも知らぬも尋てそとふ

もし人あつて子を求て觀音を念し奉ら

んに女子をえんとねかはゝ昔より徳の本

を殖うへたるかもろくの人に愛せられんをう

むへしとなり是を春きて花咲はしるも

しらぬも愛せる事によせ侍りふる野

といへるはむかし徳の本を殖たりといふ心を

いはむためなり石上ふるのゝ野への桜花

殖うへけむ時ときをしる人そなきといふうたとを

(一一・オ)

れりけり

【校異】

(一〇・ウ)②のころを―ナシ「内」、③頓阿―重阿法師「内」「承」、集付ナシ―新統古今「内」、⑤あつて―ナシ「内」、⑥徳―功德「内」、⑦たるか―たるかと「内」、⑦うむへし―えへし「内」、⑨愛せる事に―桜を愛することくに「内」、⑨ふる野といへるは―石上ふる野と云ふことは「内」、⑩たり―たる「内」、(一一・オ)①石上ふるの、野への桜花―ふるの山への桜花「内」、②といふうたをとりけり―の心歟「内」
以三種之形遊諸国土のころを

慈鎮

448

さまくくの心つくしに行舟やかはる姿にあふの松はら

あらゆる国なへての人の心になふて身を變し説法をかへて利益し給ふなりたとへは月の衆水にうつるかことしされは任運自然の遊戯なれ共人間界のならひになさらへて心つくしに行船とはいへりしかも人の心にかなふ事をあふの松はらととめ侍ればその縁語によせて心つくしといへり

(一一・ウ)

【校異】

(一一・オ)④国土―国土「承」、④のころを―ナシ「内」、⑦かなふて―かなひて「内」、⑨衆水にうつるかことし―諸人にしかふかことし「内」、⑩界―思「内」、⑩なそらへて―なそへて「内」、(一一・ウ)③よせて―ナシ「内」、③いへり―云る歟「内」
施無畏者のころを

449

おそれなき道にみちひく聖こそわか名にたちて人にしらるゝ

観音は此娑婆世界の施無畏者として人の

おそれを除給へりかくてこそわか名をも人にしられ世にもあふかれ侍るとなり

【校異】

(一一・ウ)④のころを―ナシ「内」、⑤聖―光「承」、⑤たちて―たて、「内」「承」、⑤るゝ―るれ「内」「承」、⑥人のおそれを除―人をそれをのゝき「内」、⑧世にもあふかれ―ナシ「内」、⑧侍るとなり―侍れと也「内」
受其瓔珞二分作二分のころを

俊成

450

哀とやともに光を照しけむふたつにわけし玉のかさを

(一二・オ)

いまの品のとき観音の功德を仏のとき給ふ事無尽意菩薩の間奉りしによつてなりさまくくのことほりをきひて無尽意菩薩の頭にかけたる玉のかさをときて観音に奉り給ひしに観音これを二に分て釈迦多宝の二尊に奉れり仏もさそ無尽意の布施せし瓔珞の供養をは哀とおほしめしけめといふ心なるへし

【校異】

(一二・ウ)⑨のころを―ナシ「内」、(一二・オ)①照しけむ―照すらん「内」、②いまの―此「内」、③事―ことは「内」、③奉りしによつてなり―奉るによりて「内」、④菩薩―ナシ「内」、⑤頭―頭「内」、⑤かさり―錦「内」、⑧せし―して「内」、⑨けめといふ心なるへし―けんと云心なり「内」

451

弘誓クゼイノフカキ深コトシロク如ヘテモ海コワラジ歴シヤセ劫シヤセ不シヤセ思議シヤセのこゝろを
誓ける心のやかて海なれば人を渡すにわつらひもなし

(二二・ウ)

【校異】

(二二・オ) ⑩〈詞書〉―ナシ「内」、(詠者名ナシ)―俊成「内」

崇徳院御製

452

誓をはちひろの海にたとふ也露も頼まは数に入なむ

【校異】

(二二・ウ) 〈詞書ナシ〉―弘誓深如海歴劫不思議の心をよませ給ひける「内」、集付ナシ―千載「内」

従二位家隆

453

渡すへき誓のふかき冬の海は氷も霜も結はさりけり

三首おなし文なり但はしめの哥は誓ちかひの海

にやかて済さいど度の舟をうかへ中はちひろのこと

くなる誓をたのむといひ後は八寒かんのくるし

みもあらしといふこゝろなり

【校異】

(二二・ウ) ④従二位―ナシ「内」、⑤渡す―渡る「承」、⑥おなし文なり―同文の心なり「内」、⑥はしめの哥は誓ちかひの海にやかて済さいど度の舟をうかへ中はちひろのことくなる誓をたのむといひ後は―

初の御製は千尋の海のことくなるちかひを頼むと云中なる誓の海

にやかて済度の舟をうかへ後哥は「内」、⑨あらし―有まし「内」

母の周忌しゅうきに法花経をみつから書て巻く

の心をよみてへうしの絵にかゝせけるに

八巻のこゝろを冬によせて

定家

(二三・オ)

454

歴劫のちかひの海に舟渡す生死の浪は冬あらく共

弘誓くぜいの海の舟人は生死のあらしきの海のみ
風をもおそるましといへるかや

【校異】 (二二・ウ) ⑩巻くの一巻の「内」、(二三・オ) ②よせて―寄て

よみ給ふ也「内」、④歴劫―曆劫れき「内」、④ちかひ―弘誓「内」「承」、

④渡す―わたせ「内」、④浪は冬―海は波「内」、⑤海のみみ風―

冬の波風「内」、⑥いへるかや―云るにや「内」

心こゝろ念ねん不ふ空くう過かのこゝろを

前大僧正慈鎮

455

をしなへてむなしき空と思ひしに藤咲ぬれば紫の雲

念ねんし奉る心むなしき物ならはそのしるしあ

りかたししかれとも菩薩ぼさつの約やくをたかへす

度し給ふされは暮春ぼしゆんに藤ふぢの咲ぬるか全体ぜんたい

紫雲しうんにて待るといへるにや是すなはち観音

は弥陀みだの脇士わきしの薩埵さつたなりかの来迎引撰らいおういんせんの

しるしにたつ紫雲をまのあたり藤花にて

見待るとや

【校異】 (二三・オ) ⑦のこゝろを―ナシ「内」、⑧前大僧正―ナシ「内」、

⑩心―心は「内」、⑩ならは―なれば「内」、(二三・ウ) ①菩薩の

―菩薩「内」、②度し―応し「内」、②藤ふぢの―藤「内」、③紫雲―紫

の雲「内」、③といへるにや―とは云るにや「内」、④弥陀みだの一弥

陀「内」、④脇士わきし―脇持「内」、⑤紫雲を―紫雲のを「内」、⑤藤

花―藤の花「内」、⑥とや―と也「内」

456

頼てし猶たのむかな思ふことむなく過ぬ人のめくみを

人とは観音の御事なり哥の心まへとおなし

【校異】 (一三・ウ) ⑦頼てし―憑ても「内」頼ても「承」、⑦めくみ―ち

かひ「承」、⑧哥の心まへとおなし―ナシ「内」

なき人をとふらひて法花経を書て品々の

心をよませ侍りけるに火坑ヒツク変ヘン成テイレ池イの

こゝろを

中納言為藤

(一四・オ)

なき人の別を駕のねに立る思ひよ池の水とたになれ

なき跡に残り居てしたひこかるゝ思ひの火

のくゆるさなからほのをとのほり侍るへしせめ

ては池水いけのひやかなるにへん変せよといふ心也

【校異】 (一三・ウ) ⑨法花経を―法花経「内」、⑩よませ侍りけるに―哥

によませ侍るに普門品の「内」、⑩のこゝろを―ナシ「内」、(一四

・オ) ②思ひよ―思ひに「内」、③〔左注〕―ナシ「内」

還カヘツテ着キキ 於本人ホニシニのこゝろを

平宣時

458 あしかれと人をもいはし難波かた我身の上に帰るしら浪

【校異】 (一四・オ) ⑥のこゝろを―ナシ「内」、⑦宣時―定時「内」、集付

ナシ―遺風「内」、⑧しら浪―うら波「内」

前大僧正慈鎮

白波もよせくるかたに帰る也人を難波のあしと思ふな

たとへは呪詛しゅそせらるゝ事あらむに観音を念 (一四・ウ)

し奉らはかへつて本人につくへしといへ

るこゝろなりこのゆへに難波の浦なみの

よしあしによせてよめり

【校異】 (一四・オ) ⑨前大僧正慈鎮―大納言為世「内」前大納言為世「承」、

集付ナシ―新千載「内」、(一四・ウ) ①たとへは―たとひ「内」、

②かへつて―かへりて「内」、②いへるこゝろなり―云るなり「内」、

③このゆへに―かかるかゆへに「内」、④よしあしによせてよめり―

あしをこえ侍るによせ読るなり「内」

源兼氏

460 終に又いかなる道にまよふ共契しまゝのしるへわするな

【校異】 (一四・ウ) 〔詞書ナシ〕―種々諸悪趣「内」、⑤源兼氏―源兼氏朝

臣「内」、集付ナシ―続千「内」

選子内親王

461 逢ことをいつくにとてか契るへき浮身のゆかむ方を知ねは

もろくの悪趣あくしゆにおちたらん人観音を念

し侍らん功こうによりてことく滅めつせしめむと

説文なり前の哥はふかく此誓ちかひをたのもしと (一五・オ)

なり後の哥は悪趣あくしゆにめぐりゆくさま定な

しされは此世の中に後世とたのみても心

ならずはいづくにかゆき侍らんとなかくよし

なり

【校異】 (一四・ウ) 集付ナシ―新古「内」、⑧とてか―とてか「承」、⑧浮

身―憂身「内」、⑨観音を―かねて観音を「内」、⑩功―功德「内」、

(一五・オ) ①説―かく「内」、②なり―云り「内」、②悪趣あくしゆにめ

くりゆくさま―悪趣より悪趣にめぐり行有様「内」、③心ならずは

―心ならず「内」、④ゆき―生れ行「内」

陀羅尼品ダラニホン

赤染衛門

法まもる誓をふかくたてつれば末の世までもあせしとそ思

葉王勇施の二菩薩多聞持国の二天な

らひに十羅刹女ともに陀羅尼を説て護

法の契をたて給へはいかに末の世なりとも (一五・ウ)

この法のあせ侍ることあらしと頼む心か

【校異】 (一五・オ) 集付ナシ―風雅「内」、(一五・ウ) ①契を―誓をい

つれも「内」

法印円勇

ゆきかへる雲の通路とをく共乙女の姿身をははなれし

【校異】 ナシ

八条院高倉

あまつ空雲の通路それならぬ乙女の姿いつか待みん

【校異】 (一五・ウ) 集付ナシ―新勅「内」

前大僧正慈鎮

十の名を法の筵に聞しよりけになつかしきいもかことのは

十羅刹女法花をたもつ人をは守護し侍らん

とて呪をとき侍るを待みんともなつかしき共

いへり妹とは女の事なり

(二六・オ)

【校異】 (一五・ウ) ⑦前大僧正―ナシ「内」、⑧なつかしき―むつかしき

「内」、⑨法花―法花経「内」、⑩呪―多羅尼「内」、⑩とき侍るを

待みんとも―とき給ふことをたのもしく思ひ侍て身をはなれすと

も待みんとも「内」

無二 諸 衰患のころを

うれしきは花に風なき吉野山月も曇ぬさらしなの里

毘沙門天のちかひにわか説たる呪の功力百

由旬のうちによれへなからしめむといへりそ

れを花の風月の雲によせてよめる也

【校異】 (二六・オ) ②のころを―ナシ「内」、③月も―月は「承」、④わ

か説たる呪の―ときたるたらは「内」、⑥風―あらし「内」

乃至夢 中亦復莫レ悩のころを

うつゝにはさらにもいはすぬる玉の夢の内にもはなれやはする

もろくの悪鬼きたりて法華の持者をな

やまさむに羅刹女守護してちかつけしと

いへりうつゝの事はいふにおよはず夢のう

ちなりともちかつき侍らしといふありかた

きちかひなり

【校異】 (二六・オ) ⑦悩―悩「承」、⑦のころを―ナシ「内」、

⑨はなれやはする―花や忘るゝ「内」、⑩法華―法花経「内」、(二

六・ウ) ①ちかつけしと―近付へからすと「内」、③ちかつき侍ら

し―近つけ侍らん「内」、④なり―にや「内」

シユチセンホツケノナラ モノハフクス (カラハカルカニイ) ヤラウゴセンバヤダ

受ニ持法華名一者福不レ量何 況擁 下 護具

足受持上といふ文のあたりを見て持経者の

結縁たのもしくや侍りけむ詭侍りける

前大僧正快雅

嬉しくそ名をたもつたにあたならぬ御法の花にみを結ひつる

かりに法華経といふ名をたもつを花にたとへ

一部全受持し侍るを実を結ふといへり (一七・オ)

【校異】 (一六・ウ) ⑥受持上―受持上【承】、⑥文の―ナシ【内】、⑥

見て―誦【内】、⑦けむ―けんと【内】、⑧快雅―快修【内】、集付
ナシ―千載【内】

敵王品

為通朝臣

深山にてさとり晴けるいにしへの月や馴にし友さそふらん

此品には四聖の前縁といふ事ありむかし
四人心をおなしくして法花経を修行せし
に里にいたりて衣食の便をもとめ又ゆふ
へには山に帰りて道を修せしにそのあはひ
とをくして日々のかよひにつかれはて修行
ものうく侍り其時四人の中に一人申けるは
三人こゝをさらすして修行をはけまし
侍れわれ一人里に日々にいたりてはくゝむ
へしといへり三人それを嬉しき事に思
ひて山ふかく籠居して修行す一人は里
にくたり頭陀をして約束せしかことく
やしなひけるに彼一人或時大王の行幸
を見侍りてうらやましくおもへりしかるに
彼法花修行の功有漏の果報にむくひ
侍りて世々に王にむまれぬをはりに妙庄
敵王と申王に生れたり以外の邪見の悪
王にて侍りされは此果報の後あく道に
おち侍らん事決定せりそのとき三人これ

(二七・ウ)

(二八・オ)

を見て思ふやうは我等修行をはけまして
既に仏果にちかつき侍る事も彼一人のは
くゝむによりりその恩を忘れて墮獄せし
めむ事くちをしかるへしいかゝしてかれをす
くはむとうちあつまりて談合せしにその
時彼中に一人申やう少々の事にては仏
道に心を引入かたかるへし所詮三人の中に
一人さききに生れ二人は子と変して心を
引侍らんといふあひたその義にまかせて一人
は淨徳婦人と申后に生れ二人は淨藏淨眼
といふ子に生れきてさまゝに方便して
つゝに雲雷音王仏と申仏のみもとへいさ
なひてさとらしめ侍りきされは今の哥
にさとり晴たる月とは三人の事なり友と
は妙庄敵王の事なり

【校異】

(二七・オ) ⑤事あり―事也有【内】、⑥四人一人【内】、⑧山に―
ナシ【内】、⑨とをくして―遠しなり【内】、⑨かよひに―通ひ【内】、
⑩はて―はてゝ【内】、⑩侍り―侍ける【内】、(二七・ウ) ①三人
―三人は【内】、③三人それを―三人は【内】、④籠居して―閉籠
て【内】、⑤くたり頭陀をして―くたりて頭陀して【内】、⑤約束
せしかことく―約束のことく【内】、⑥ける―侍る【内】、⑥行幸
を―行幸に【内】、⑧修行の功有漏の―修行者功者偏の【内】、⑨
侍りて―侍り【内】、⑩生れたり―現せり【内】、(二八・オ) ②せ
り―なり【内】、③我等―われゝ【内】、③修行を―修行【内】、

④はくゝむーはくゝみ「内」、⑧一人ーナシ「内」、⑧少々の事に
てはー少々にて「内」、⑩一人ー一人は「内」、⑩子とー子に「内」、
(一八・ウ)②婦人ー夫人「内」、夫人「承」、③生れきてー生れて
「内」、③さまくくにーやうくに「内」、⑤今のー今「内」、⑥友
とはー友さそふとは「内」

法印憲実

時雨ねとをのれ移ふ柞原木の下露のいかて染けん

【校異】(一八・ウ)集付ナシー続後撰「内」、⑨いかて染めーいかそめ「内」

祝部成仲

471 たらちねをまことの道にすゝめ入て子はいか斗嬉しかるらん

【校異】(一九・オ)集付ナシー同「内」(一九・オ)

権律師玄覺

472 まよひこし心の闇をしるへにて子を思ふ道に月をみる哉

いつれの哥も二子婦人の教引によりて仏

道に父の入侍る事を読侍り中にもは

しめの哥は二子まつ父をすくふへきやうを

母の婦人に申給ひしを木のした露のいかて

染けむといへるにやすゑの哥は子を思ふ道に

月を見るときは二子のすゝめをうけひくは子を思

ふからなりをのつから善知識となりてさと

りをひらく故に月をみるといへり(一九・ウ)

【校異】(一九・オ)集付ナシー新統古「内」、③こしーこし「内」、④婦人

ー夫人「内」、④教引によりてー教に引れて「内」、⑥二子ー二子

の先「内」、⑥父をー父に「内」、⑦母の婦人にー母のまへにて「内」、

⑧すゑのー末なる「内」、⑨うけひくは子を思ふからなりーうけひ
けはおもひよらすなから「内」、(一九・ウ)①ひらく故にーとも
に開侍ゆへに「内」

前大納言為定

473 いまそしる枝をつらぬる木の本にさとひらけし親の心は

【校異】ナシ

頓阿

474 しるへして又木の本にさそひしやおなし山路の契なるらん

まへの哥に枝をつらぬるとは連枝をいひ後の

うたは昔の契くちすしてともに仏道に入

侍るなるへし

【校異】(一九・ウ)※「内」ニハ当該歌ナシ、詠者名ト左注ノミアリ。⑥

まへの哥に枝をつらぬるとは連枝をいひー前の哥は連子を枝をつ

らぬると云「内」

母のために法華経をかき侍りける時読侍り

ける 定家

475 子の道をしるへと頼む跡しあらは迷し闇も空にはるけよ

(二〇・オ)

むかし敵王の二子の汲引によつて心の闇は

れし跡をつひてわか母をもしかあれと也

【校異】(一九・ウ)⑨法華経をかき侍りける時ー経書ける時「内」、⑨読

侍りけるーナシ「内」、集付ナシー新拾遺「内」、(二〇・オ)①あ

らはーあれは「内」、①迷し闇も空にはるけよー迷し闇もけふはは

るけよ「承」、②汲引によつてー汲引によりて「内」汲引によ

つて「承」、③つひて―つきて「内」、③母をも―母も「内」
又如三眼之亀値ニ浮木孔のこゝろを

俊成

我やこのうき木にあへる亀ならん劫はふれ其法はしらぬを

仏法にあひ待るは目しひたる亀の浮木のあ

なにあへるかことしととけりそれをいまの作者

仏法をえ侍らぬはさなからうき木の亀そと

ななくよしなり

【校異】 (二〇・オ) ④「眼―眼」イチガシ「内」、④のこゝろを―ナシ「内」、⑧と

とけり―と云り「内」、⑨仏法を―心に仏法を「内」、⑩よしなり

―よしなり如何「内」

願 母放 三我等出家作 二沙門のこゝろを

前大僧正慈鎮 (二〇・ウ)

477

たらちねをみちひかんとやたゝちめにこひし暇の末そ嬉しき

二子父を仏所へみちひかんとてまつ母の婦人

に出家をゆるし給へといとまをこひし事

なり其時母ちゝに申せは父のゆるし給はゝ

われもろともに仏の道にまいり侍らんとの

たまひし事なり

【校異】 (二〇・ウ) ①のこゝろを―ナシ「内」、②前大僧正―ナシ「内」、

③とや―とや「内」とて「承」、③たゝちめ―たらちめ「内」、③

こひし暇―恋し今は「内」、④仏所へ―仏所に「内」、④母の―母

を「内」、④婦人―夫人「内」、⑥母ちゝに申せは父の―父母に申

せしに父「内」、⑦道に―みもとに「内」、⑧事なり―こと歟「内」

478

善知識者是大因 縁のこゝろを

前大僧正慈鎮

人のきてみちひく野へに出ぬれば麻の中なる蓬をそみる

巖王邪見即正のさとひらけてのちはこ

れしかしなから二子の教化によるゆへに善知識

なりとの給ひ侍りそれを麻の中なる蓬

にたとへていへり

【校異】 (二〇・ウ) ⑨のこゝろを―ナシ「内」、⑩前大僧正慈鎮―ナシ「内」、

(二一・オ) ①のきて―のきゝて「内」、③教化によるゆへに―教化

故也たゝ「内」、④中なる―中の「内」

勸発品

定家

479

東風に散しく花の匂ひきて鷺の御山のあるしをそ思

【校異】 (二一・オ) ⑦定家―定家卿「内」、⑧東風―東風かせ「内」、⑧花

の―花も「承」、⑧思―問「内」

前大僧正慈鎮

聞はつる花の御法の末にこそ定めをきける身共しりけれ

勸発とは法をこふる詞なり既に上の品の

とき法花経みな説をはりて席をまかむと

せしに東方宝威徳上王と申仏の国より

普賢と申菩薩靈山にきたりて本国に

て遙に法華経を聞侍りきさて如来滅

後の衆生はいかにして修行をなし此経を

480

(二一・ウ)

え侍るへきとすゝめ奉り給へり是によつて積尊要を促て結要と申事を説

給へり如来の滅後には此四法を修行せば法華をえたるなるへしとなりはしめの哥に

東風に散しく花とは靈山説法のをはり

侍る事なりあるしをとふとは四法を仏に勸発し奉る事なり後の哥に定をきける身といへるはす多の世にも此四法を修行せむものは成仏の器 そとの給ふ事をいへり

(二二・オ)

【校異】

(二二・オ) ⑨前大僧正慈鎮一ナシ「内」、⑩けるぬる「内」、⑩けれぬれ「内」、(二二・ウ) ①とはと云るは「内」、①詞こ

と「内」、②をはりて給て「内」、③せしにせし時「内」、④普賢一普賢菩薩「内」、④と申菩薩一ナシ「内」、④本国一我本国「内」、

⑤遙に法華経一遙我は法花経「内」、⑥いかにしていかに「内」、⑥なしなしてか「内」、⑦よつてより「内」、⑧促て一つ、

めて「内」、⑧結要一四結要「内」、⑨法華一法花経「内」、(二二・オ) ①散しく花とは散花の匂ひとは「内」、①靈山一靈山の「内」、

③事なりなるへし「内」

從一東方一來所一諸國普皆震動雨二宝蓮花一のころをよみ侍りける

俊成

さらに又花そ降しく鷲の山法の筵の暮かたの空

普賢の彼国より来りし道すから宝蓮

花をふらする事をいひなからしかも靈山の

(二二・ウ)

説法をはりたる事をふくめりさらにまた降しくとはかさねて四要の法をとかしむ事なるへし暮かたの空とは廿八品のすゑなればしかいふなるへし

【校異】

(二二・オ) ⑦よみ侍りける一ナシ「内」、⑧俊成一俊成卿「内」、⑨暮かたの夕暮の「承」、(二二・ウ) ①ふらする一ふらせし「内」、①事をいひなからしかも靈山の説法をはりたる事をふくめりさらにまた一ことをふくめりきて更に「内」、③とかしむ事なるへし一とかしめ給ふ事なるへしされは「内」、④空とは一空と云り

「内」⑤なればしかいふなるへし一はれば也「内」

法印成運

482

見ぬ人のためとや鷲の山桜ふた度とける花の下ひも

【校異】

(二二・ウ) 集付ナシ一続千載「内」、(左注ナシ)一心かみのことし「内」

483

待出ていかに嬉しく思ふらん廿日あまりの山の端の月

此経をもしは書写しもしは説誦して一

心に精進しておこたらすは三七日を満せむときわれ六牙の白象に乗してその人の前に現してまみゆへしと普賢菩薩のちか

ひ給ふゆへに山の端の月を待出るにたとへてよめり廿日あまりは三七日の満するなる

へし

(二二・オ)

中原有秀

満三七日一已乘二六牙白象王一のころを

【校異】 (二三・ウ) ⑧有秀―有安「内」「承」、(二三・オ) ⑩嬉しく―嬉し

と「内」、(二三・オ) ③白象―白象王「内」、⑤給ふゆへに―給

へる故に「内」、⑤たとへてよめり―たとへたり「内」

仙洞にてかさねて如法経書写し侍し時

普賢大士白象王に乘して夢のうちに

現し給ふ事をよみ侍りける

権大僧都宣実 (二三・ウ)

見る夢の面影までやうかふらんきさのを川の有明の月

きさの小河は名所なり象の字をきさとよ

み侍るゆへにきさの小川と読侍る歟

【校異】 (二三・オ) ⑧経書写し―写経し「内」、⑨白象王に乘して夢の

うちに現し給ふ事を―乗白象王の夢の心を「内」、(二三・ウ) ①

宣実―憲実「内」「承」、集付ナシ―続古今「内」、③小河は―を川

「内」、④と読侍る歟―によせ給へるなり「内」

宗尊親王家三川

曇なき法の光のさしも草露も迷ももしや残さん

是も普賢白象の現身に行者の前に現

するを光のさしも草にたとへしかも此大士

は懺悔滅罪の教主なれば露も迷も残ら

すとは罪のきゆる事なりやの字はやはと心

得へし

【校異】 (二三・ウ) 集付ナシ―遺風「内」、⑥露も―露の「内」、⑦白象

―白象王「内」、⑦現身に―現身の「内」、⑧するを―することを

「内」、⑧草にたとへ―草とたとへたり「内」、⑧しかも―尔も「内」、

⑨露も―露の「内」、⑨残らず―残らし「内」、⑩やの字は―やの

字「内」 成ニ・就四法シヤウシスルシホウヲのころを讀侍りける 前大僧正慈鎮

法の水を仏の御名につたふとて四の心に結び入ける

四法とは一に諸仏に護念せられ奉り二に

もろくの徳の本をうへ三に正定聚に入

四に一切衆生をすくふ心を発せとの第一の

ころを法の水をほとけの御名につた

ふとはいへる歟

【校異】 (二四・オ) ②のころを讀侍りける―ナシ「内」、③前大僧正―

ナシ「内」、④御名―御子「承」、④心に―心そ「内」、⑤とは―と

云は「内」、⑤奉り―奉る「内」、⑥もろくの徳の本をうへ―殖

諸徳本「内」、⑥に入―ナシ「内」、⑦との―となり「内」と也「承」、

⑧御名―御子「承」、⑨いへる歟―云なり「内」

殖ニ衆徳本ウエルモロクノトクホンヲのころを

稀に逢御法の花の色みてそ殖けむ世々の種もしらるれ

(二四・ウ)

【校異】 (二三・オ) ⑩殖ニ衆徳本―殖諸本「内」、(詠者名ナシ)―

頓阿「内」、(二四・ウ) ①しらるれ―しらるゝ「内」

即往都率天スナチユク トウツアンニの心を

俊成

はるかなるその暁を待すとも空の気色は見るへかりけり

此品に法花修行の人は都率天の弥勒菩薩

薩のわたらせ給ふ所へ生るへしとみえた
れは三会下生の暁をまたすともはや彼
菩薩にあひ奉るへしとなり

【校異】 (二四・ウ) ②天―天上「内」、②の心を―ナシ「内」、④見るへ

かり―見つへかり「内」「承」、⑤此品―経「内」、⑥所へ―所に「内」、

⑧となり―と云り「内」

皆是普賢威神之 力のこゝろを

前大僧正慈鎮

霜をはらふあるしとなれる力とて枯ぬ御法の花を見る哉

(二五・オ)

霜をはらふあるしとはさきにいへるかことく

懺悔滅罪の教主なりといふ心なりその故に

後五百歳の末の世も閻浮提に此経流布

する事此大士の力なるへしといふ心なり

【校異】 (二四・ウ) ⑨のこゝろを―ナシ「内」、⑩前大僧正―ナシ「内」、

(二五・オ) ①花を―花も「内」、②いへるかことく―云ることく

「内」、③なりといふ心なりその故に―なると云なりそれ故「内」、

④世も―世くも「内」、④此経―此経の「内」、⑤する事―する

と「内」、⑤といふ心なり―と云なり「内」

受持仏語作礼而去のこゝろを

馴く涙の雨やくもるらん帰る空なき鷲の深山路

八ヶ年の経を説をはりぬれば猶帰る人さへなき

となり

【校異】 (二五・オ) ⑥《詞書》―ナシ「内」、《詠者名ナシ》―慈鎮「内」、

⑧の経を説―をへてとき「内」、⑧人さへなきとなり―人すくなき
となり「内」

寂然

491 ちりくくに鷲の高根ををりそ行御法の花を家つとにして

この経を受持し侍りて霊山よりをりくた (二五・ウ)

りし人にはさなから花を土産に折かさすかこ

とといへり

【校異】 (二五・オ) ⑨寂然―ナシ「内」、集付ナシ―新勅「内」、(二五・

ウ) ①侍りて―侍りて八ヶ年のおほりに「内」、①くたりし人には

―くたる人々「内」、②花を土産に折かさすか―家つとに折かさせ

る「内」

普賢経

定家

492 朝日影思へはおなしよるの夢別にしほるしのゝめの露

仏初成道のあした花嚴経とき給ひし時

は仏日はしめていつれば朝日影といへりさて

普賢経の時いま三月を過て涅槃し給ふ

へしと告給へは五十余年の御在世たゝ春

の夜の夢のことしかつこの告よりしてか (二六・オ)

なしむ心の侍れば別にしほるしのゝめの露

といへり

【校異】 (二五・ウ) ⑤定家―定家卿「内」、⑦花嚴経―花嚴経を「内」、⑧

いつれば―出ぬれば「内」、⑧さて―さて法花経を説終て「内」、

⑩春の夜の―ナシ「内」、(二六・オ) ③といへり―と云る歟「内」

参議雅経

兼てよりかすめる空の色を見る春の半の入かたの月

かねてより霞といへるは普賢経のとき 却後カヘツテノチ

三月 月当二涅槃一と告給へる事なるへしさて

二月十五日まさしく涅槃に入給へは春の半

の入かたの月といへり

【校異】 (二六・オ) ③参議 ナシ「内」、⑤霞―霞る「内」、⑥涅槃―一般

涅槃「内」、⑦十五日―十五日に「内」、⑦給へは―給へるは「内」

我心 自 空 罪 福無主のころを

寂然

かつま田の池の心はむなしくて氷も水もなのみ成けり

(二六・ウ)

此经文は観無生の懺悔をとく文なり観無

生といへるは我心の空 寂なる事を觀し侍れば

罪とかとても造ぬしなく善根も又しかなり

是によつて罪福ともに朝の露霜のことくに

觀念にてらされてとけはつるといふ心よ氷

はつみ水は善根つみはあく福は善なり

【校異】 (二六・オ) ⑨のころを―ナシ「内」、⑩寂然―寂然法師「内」、

(二六・ウ) ④造―つくなる「内」、⑤よつて―よりて「内」、⑥

心よ―心か「内」

衆罪如三草露一恵日能消除のころを

俊成

露霜とむすへる罪のくやしさを思ひとくこそ朝日成けれ

【校異】 (二六・ウ) ⑧草露―霜露「内」、⑧のころを―ナシ「内」、⑨

俊成―ナシ「内」、集付ナシ―新後撰「内」、⑩くやしき―くやし

き「内」

定家

(二七・オ)

頼むかな浮世を秋の草のうへに結ぶ露霜きゆる日影を

【校異】 ナシ

宗尊親王

露霜の消てそ色は増りける朝日にむかふ岑の紅葉と

【校異】 (二七・オ) ④紅葉―黄葉「内」

西行

散しきし花の匂ひの名残たにたまうかりし法の場合哉

散しく花は法華経のをはる事なるへし此

普賢経は法花の結経なれば八年の名残おほ

くしてたまうしといふ心か

【校異】 (二七・オ) ⑥名残たにたまうかりし法の場合―余波おほみた、

まくおしき法の庭かな「内」、⑦花は―花の匂ひは「内」、⑦法華

経―法花「内」、⑧法花の結経なれば―法花経結経の座なれば「内」、

⑧名残―余波「内」、⑨たまうしといふ心か―たまうしと云

心也「内」

見三諸障 外事のころを

源兼氏

(二七・ウ)

春の夜の霞や空に晴ぬらん朧けならぬ月のさやけさ

此経の中に六根懺悔の方軌を修し大乘の

經典を誦誦して普賢大士を見奉ること

を説給へりさはりの外の事とは六根（こん）の罪障（つみ）の外の事なり春の夜の霞の晴るゝとは罪（つみ）のうすくなる儀なりおほろけならぬ月を見るとは諸仏（しよぶつ）菩薩を見奉るなるへし

慶安五年仲春 風月庄左衛門

【校異】(二七・オ)⑩のこゝろを―と云心「内」、集付ナシ―新後撰「内」、

(二七・ウ)④普賢大士を―普賢大士のを「内」、⑥の外の事―ナシ

「内」、⑤とは―は「内」、⑦うすくなる儀なり―うすくなる也「内」、

⑧なるへし―ことなるへし「内」⑨「承」本、九行目ヨリ、「十界分」

トシテ歌ノ増補アリ(補遺参照)、⑩慶安五年仲春 風月庄左衛門―

(「十界分」ノ後、二八丁・ウラ・十行目ニ) 承應二仲秋吉 風月庄

左衛門行「承」

※「内」二次ノ奥書アリ。

予所編輯之譯和々歌集之中法華部歌可

加注解之由任於檀命應願所請于首梗齋首

玄修有寫模之惘望仍書兩卷授与之畢

法印實海在判

補遺

499 底本である国文学研究資料館所蔵 慶安五年刊『訳和歌集』は、
番歌をもつて終わるが、底本の虫損箇所を補う上で採用した駒澤大

学図書館所蔵 慶安五年刊『訳和歌集』と、これまで対校本として用いてきた国文学研究資料館所蔵 承応二年刊『法花訳和集』には、499番の実海注のあと、次の行より「十界分」とあり、十首の歌が増補されている(注)。しかし、この二つの「十界分」の間には、詠者名の有無や語句の異同が見られるため、以下のように二段に分けて、それぞれの「十界分」を載せることとする。ただし、下段の国文学研究資料館所蔵『法花訳和集』の虫損箇所(□で囲んだ部分)については、叡山文庫所蔵本によつて補った。また、明らかに誤字と思われる箇所については、(ママ)とした。

駒澤大学図書館所蔵 慶安五年刊『訳和歌集』		国文学研究資料館所蔵 承応二年刊『法花訳和集』	
十界分 (二七・ウ・九行目)	地獄	十界分 (二七・ウ・九行目)	地獄 後京極
もゆる火もとつる氷も消やられて	幾世迷はん長夜の夢	もゆる火もとつる氷も消すして	幾世迷はぬ長夜の夢
餓鬼	身をせむるうへの心に堪かねて	餓鬼	同
畜生	子を思ふ道を忘れぬる哉	畜生	同
水にすみ雲井にかける心にも	浮世の夢はいかゝのかるゝ	水にすみ雲井にかける心にも	浮世の雲はいかゝかなしき
修羅	波たてし心の奥のはてはまた	修羅	同
苦しき海の底に住哉		波たちし心の道のすへはまた	苦しき海の底に住哉

人道	人道
いたつらに月日はかなく明暮て	ゆめの世に月日はかなく明暮て
又はえかたき身共知らすや	又はえかたき身共知らすや
天道	天道
玉かける跡には露を置かへて	玉かけし跡には露を置かへて
色おとろふる天の羽衣	色おとろふる天の羽衣
声聞	声聞
終りなく苦しき道にまよはまし	はてもなくむなしき道にきえなまし
鶯の御山の法に逢すは	鶯の御山の法に逢すは
縁覚	縁覚
奥山に独り浮世は覺りにき	奥山に独り浮世は覺りにき
常ならぬ色を風に任て	常なき色を風に詠て
菩薩	菩薩
秋の夜の文字は一よを限にて	秋の月もちは一よを隔にて
かつく残る月も <small>(マ)</small> 猥なき	かつく残る影そ <small>(マ)</small> 猥なき
仏界	仏界
くらからし雲はさながら晴のきて	くらか <small>かり</small> し雲はさながら晴つきて
又うへもなくすめる月哉	又うへもなくすめる月哉

(注) 拙稿『『訳和歌集』翻刻と解題 附校異(四)』、『文献探究』第四二号
 七五頁、平成一六年三月)において指摘した。この「十界分」の増補と、
 「能星」作とされる歌三首の増補とが、改訂の進んでいった『訳和集』
 刊本に見られる大きな特徴である。後者については、同拙稿(一)四九
 頁で述べ、続く(二)において「能星」という人物とその歌に関する考

察を試みた(『文献探究』三九、四〇号・平成十三、十四年三月)。現在四つに分
 類できる『訳和集』刊本の成立過程については、那須陽一郎氏による『『訳和歌
 集』本文の研究―慶安五年刊本・承応二年刊本 本文異同一覧―』(『日本大学大
 学院国文学専攻論集』第一号、二〇〇四年、九月)がある。

付記 長きにわたり、翻刻掲載の御許可を賜りました国文学研究資料
 館・内閣文庫・駒澤大学図書館・叡山文庫の各館に、記して深
 甚の謝意を申し上げます。

(うちの ゆうこ・西南学院大学非常勤講師)